

# 十日市場の鼻採地蔵

はなとりじぞう

甲府盆地に春を告げる祭り「十日市」。今回は、この十日市の市神さま、通称安養寺の鼻採地蔵の伝説です。

甲州巨摩郡鮎沢の庄にある十日市場村に農業を業とする、代々裕福な家がありました。この家の夫婦は、安養寺のお地蔵さまをととても信仰していて、お花やお供え物をするために、家の召使をお寺に参らせることを雨の日も風の日も怠らず、長年一心にお祈りしてきました。

ある年のことです。新春の春の花も夏のみどりにたち代わり、田植えの時期を迎えました。この夫婦も近隣から人を集め田植えの準備を行いました。まだ人が足りません。農家はお互いに忙しい時期で、ほかに雇う人もなく、田んぼの代かきをする馬の鼻先をとって導く人をどうしようかと困っていました。



安養寺

思わず妻がいきました。「日ごろ地蔵菩薩にお供えをする金で召使の子どもの一人でも養ってあげれば、これほど困ることもなかったらうに、どうしたものか」。そんな時、ふと門の方をみると、あやしい小僧がひとり門前に佇んでいます。夫婦は、これ幸い、

あの小僧を雇い、馬の鼻をとらせ代かきさせようと考え、小僧に手伝ってくれば、物を食せ、銭をとらせよう。そうすれば互いのために成るのだと言いかせました。

元来（お地蔵さまとして）お考えがあることだったので、小僧はうなずき、馬の鼻をとると、多くの田んぼをまたたく間に打ち返し、植えられた早苗もなぜか他よりすばらしくみえたので、周りに集まっていた人々も不思議に思いました。

夫婦も喜び、銭などをとらせていると小僧はいつの間にか居なくなってしまうことが、忙しさに紛れだれも怪しんで問う人はいませんでした。

そのようにして夜も明け、翌日いつものお供え物をするために召使の子どもを安養寺に参らせると、召使の子どもは、そこでお地蔵様の木像が泥や土にまみれているのを



安養寺鼻採地蔵

見て驚いて立ち帰り、夫婦にそのことを告げました。

夫婦は慌てて走っていき、「さては近所の子どもたちのしわざだな」と嘆かわしく思い、急いできれいな水を汲んでお地蔵様をお洗い申し上げました。

そのときです。一緒にいた召使の子どもが、突然全身から汗を流し、にわか狂乱して口ばりしました。「われはこの地蔵菩薩である。日ごろの夫婦の信仰に感心し、小僧の姿に身をやつし、馬の鼻をとって代かきをして、地蔵菩薩として人々の苦しみを代わって受ける誓いを末代までも捨てず、この濁世に迷う人々に信仰を勧めるため、その印にわが身に泥をぬったものをその甲斐もなく洗ってしまったことよ」。そういうとどつりついた物の怪は覚めました。

それ以来、このお地蔵様は「鼻採地蔵」と

呼ばれ、さらに人々の信仰をあつめるようになりました。

お地蔵さんが人の形に身をやつして牛馬の鼻先をとって農作業を手伝ってくれるお話は、実はいろいろな形で全国各地に存在します。十日市場の鼻採地蔵さんのお話も、主人公が貧しい老夫婦だったり、子どもがいない夫婦が人手に困っていたりと、いろいろな話が伝えられています。今回ここに紹介した物語は、それは少し趣が違います。

実は、今回の紹介したお話は、当の安養寺に伝わる「鼻採地蔵縁起」という巻物に書かれているお話をわかりやすく読み下したものです。「縁起」は、江戸時代の初め、この地出身の野呂瀬主税助（ちからぬすけ）という武士が書き残したもので、今回紹介したお話が、いわば十日市場の鼻採地蔵のお話の本来的形ということになれるのかもしれない。



鼻採地蔵縁起